

市が被告となった損害賠償請求訴訟の結果

山根議員から提訴された損害賠償請求訴訟の判決が確定しましたので、経緯および結果などをお知らせします。山根議員には、4年という長期にわたる裁判、そして公私にわたるさまざまご労苦に対し、心痛を察するに余りあります。市として裁判の判決を大変重く真摯に受け止めます。

事件の概要 一審原告：山根温子 一審被告：安芸高田市、石丸伸二（個人）

経緯

2021年	6月 9日	山根温子氏が、石丸伸二氏（個人）に名誉を毀損されたとして損害賠償を求める訴えを提起（損害賠償500万円）。
	9月 3日	告知人（被告）石丸伸二氏（個人）が、市長であるため、市が責任を負う可能性があるとして、市に訴訟告知。
	9月16日	石丸伸二氏（個人）の言動は、市長としての行為であるとして安芸高田市に対して損害賠償を求める訴えを提起（損害賠償330万円）。
	9月29日	石丸伸二氏（個人）に対する損害賠償請求事件と安芸高田市に対する損害賠償請求事件が併合される。 ※石丸伸二氏（個人）および安芸高田市に対する訴訟は、被告は異なるが事実関係や証拠が同一の訴訟であるため併合され審理されました。
2023年	12月26日	第一審判決言い渡し。 ※議会内発言は原告の社会的評価を低下させるものであり、各投稿は名誉を毀損するものといえる。また、石丸伸二氏（個人）による本件議会内発言および各投稿については、国家賠償法上の違法性が認められるため、安芸高田市は国家賠償法上の責任を負う。
2024年	1月 4日	一審被告市補助参加人として石丸伸二氏（個人）が広島高等裁判所に控訴を提起。
	1月 9日	山根温子氏が控訴を提起（石丸伸二氏（個人）と市に対し損害賠償330万円）。
	1月 9日	市が控訴を提起。
	4月17日	被控訴人兼一審第2事件被告補助参加人の石丸伸二氏（個人）が控訴を取り下げ。 ※市が控訴を提起したことにより、控訴が重複しているため。
	7月 3日	控訴審判決言い渡し。 ※原判決は相当である。
	7月 4日	上告受理申立補助参加人として石丸伸二氏（個人）が最高裁判所に上告受理申し立て。
2025年	4月23日	最高裁判所が上告審として受理しないことを決定。

判決の内容

第一審	● 被告安芸高田市は、原告に対し、33万円及びこれに対する令和3年9月28日から支払済みまで年3パーセントの割合による金員を支払え。 ● 原告の被告安芸高田市に対するその余の請求及び被告石丸に対する請求をいずれも棄却する。 ● 訴訟費用は、原告と被告安芸高田市との間に生じたものは、これを10分し、その9を原告の負担とし、その余を被告安芸高田市の負担とし、原告と被告石丸との間に生じたものは原告の負担とする。
控訴審	● 一審原告及び一審被告市の本件各控訴をいずれも棄却する。 ● 一審原告の控訴費用は一審原告の、一審被告市の控訴費用は一審被告市の、当審における補助参加によって生じた費用は被控訴人石丸の、それぞれ負担とする。
上告審	● 本件を上告審として受理しない。 ● 申立費用は申立補助参加人の負担とする。

判決内容の履行

2025年	5月13日	判決金330,000円、遅延損害金（年3%）35,877円支払い。
	6月18日	山根温子氏が、市に対し判決で命じられた「訴訟費用負担分（訴訟費用の10分の1）」の請求を放棄。

求償の取り扱い

2025年	7月30日	判決金、遅延損害金および裁判費用の全額が保険適用となり、保険会社から市への保険金の振り込みを確認。 山根温子氏のこれまでの大変な思いから求償権を行使すべきと考えていましたが、市の損害が保険で補填されたことから、求償すべき債務が消滅したので、求償権は無くなりました。これを区切りとして、市政を前に進めていきます。
-------	-------	--

〒760-0801 安芸高田市 総務課 行政係 ☎お太助フォン 42-5611

1958(昭和33)年9月20日もしくは21日 向原高校創作オペラ 「毛利元就」 (歴史民俗博物館蔵)

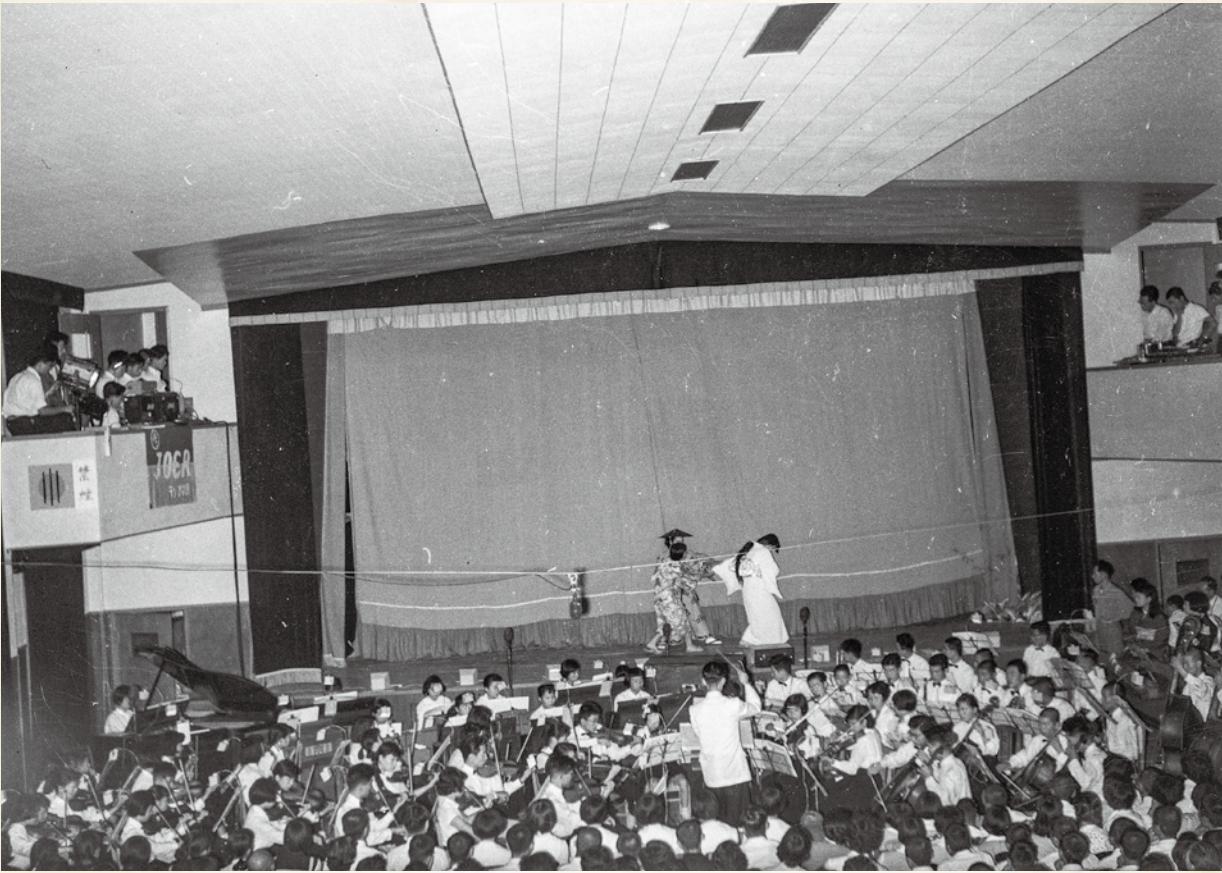
安芸高田
歴史紀行



あきたかた
れきしきこう

安芸高田市歴史民俗博物館
学芸員 古川 恵子

あの日の記憶は
写真の中にII [34]



幕前で武士が白装束の女性の袖を引き、少女がそれを止めている場面のようです。手前にはオーケストラ、その後ろに観客、2階左右に見えるのは音響と照明係でしょうか。

向原高校は、創立10周年を迎えた文化祭で全校生徒が参加した創作オペラ「毛利元就」を披露しました。

創作の基にしたのは毛利元就の逸話「百万一心」。郡山城の難工事のために巡礼の娘が人柱に選ばれましたが毛利元就がこれ許さず、代わりに「百万一心」と刻んだ石を石垣の下に埋めることで工事を成功させたという話です。

構成・脚本・作曲は教師が担当し、生徒の意見も取り入れられています。演者は俳優、オーケストラ、合唱団、舞踊、邦楽演奏など約250人が出演。他にも化学クラブが照明の制作、社会クラブは毛利元就の史跡調査や資料収集・衣装考証、家庭クラブも共同で衣装考証と衣装作り、園芸クラブは小道具の制作を担当するなど、5月から始まった準備は夏休みを返上して行われ、PTAや外部の支援も受け、学校を挙げての取り組みとなりました。

文化祭直前の新聞は「霧深い中国山脈の谷あいの一高校が、いま日本の音楽史にもかつてなかった途方もない壮挙をやったのけようとしている」と紹介し注目の高さがうかがえます。

9月21日の一般公演は午前と午後、それぞれ約2時間に及ぶ2幕構成の本格的な舞台が披露され、郡外からも人が集まり、いずれも超満員で大盛況だったようです。

【注】…1958年9月16日読売新聞に掲載